

大学ハンドボール部における理想的な組織体制

スポーツマネジメントゼミナール 1316042 内記 貴良

1. 研究動機・研究目的

日本国内には、無数のスポーツチーム、運動部が存在している。運動部におけるマネジメントは非常に重要であり、運動部のマネジメントに関する研究は数多く行われてきているが、発展途上にあるハンドボール競技において、マネジメントに関する研究がほとんどみられない。

また、多くの研究は満足度やリーダーシップや組織機能といったマネジメントの一部に焦点をあてることが多いが、マネジメント全体に着目した研究は少ない。運動部が効果的に活動していくにはマネジメント全体を考えアプローチしていくことが必要であり、理想である。理想のマネジメント方法としては、Chelladurai (1999)の人的資源マネジメントモデルがある。チームを構成するメンバーの能力やパーソナリティ、価値観の違いを考慮してリーダーシップや評価などを行うことで、組織の満足度やコミットメントを高める。しかし、同モデルにおいて重要な要素の一つである選手のパーソナリティやコミットメントとチームのマネジメントを結びつけて行っている研究は少ない。また、それらをチーム間で比較検証を行った研究も存在しない。したがって、ハンドボール競技における研究では、ハンドボールを行う選手のパーソナリティの特徴やチームに対するコミットメントや価値観などの関連を把握する必要があると考える。

そこで本研究の目的は、パーソナリティとコミットメントに焦点を当て、人的資源マネジメントモデルを考慮し、ハンドボール選手のパーソナリティの特徴について検討することであった。また、J大学ハンドボール部を対象とし、選手の特徴とマネジメント体制や方法についても考察することであった。さらに、他チームとの比較検討を行い、大学のチームに差があるのかを検討することを目的とした。

2. 研究方法

本研究は、2019年度関東学生ハンドボール2部の大学の選手89名を対象に、Google Formによるアンケート調査を行った。調査項目は、選手のスポーツに対する意識や態度、価値観を持っているのかを把握するために、修正版スポーツパーソナリティ調査項目(永井, 2019)62項目を使用した。また、選手が所属するチームへのコミットメントと満足度を把握するために因子として確認することのできた21項目(田尾, 1997)を抜粋して援用した。分析は永井(2019)の分析方法を基にIBM SPSS Statistics Version 21を用いて、一元配置分散分析や、MANOVA、 χ^2 検定を行った。

3. 主な結果と考察

本研究におけるハンドボール選手のパーソナリティの特徴としては、永井(2019)の7つの分類のうち、4つ(非競争型、平均型、人間関係重視型、The 体育会型)に分類された。

J大学ハンドボール部の選手の特徴としては、他大学よりも「人間関係重視型」の選手が

多いことが明らかとなった。したがって、J大学におけるマネジメントでは厳しい練習や選手評価だけではなく、人としての成長や人間関係の充実を図れるよう、練習以外で充実できる機会の提供が必要であることが予想される。

他チームとの比較では、比較検証を行うことができた3大学を抜粋し、競技成績以外に特徴があるかを検証したが、有意な差は認められなかった。

以上の結果において、特徴や比較検討において差が認められなかった。また、競技レベルとパーソナリティやマネジメント経験と組織コミットメントに関連があるかを検証したが、これらにおいても有意な差は認められなかった。

一方で、パーソナリティと組織コミットメントに関連があるかを分析したところ、チームを辞めるべきではないという意識があるかを表す「規範的（日本的）要素」とチームを辞めるに伴うコストに基づいた帰属意識を表す「存続的要素」の2要素に有意な差が認められた。この結果から、スポーツに対する意識が高いほど、組織に対しての帰属意識が高まることが示唆された。

4. 結論

本研究の結論として以下の結論が得られた。

1. 本研究における計89名のパーソナリティは、データとして使用できるものは4つに分類されたが、主に3つのパーソナリティに偏りがみられた。

2. J大学ハンドボール部における特徴は、他3大学と比較したところ、パーソナリティ4の割合が高く、マネジメント方法に関しては、体育会系のタイプとのバランスを取りながら行う必要があると考えられた。

3. 検証に用いることができた3大学との比較では、パーソナリティ間には大学間には差が無いことが明らかとなった。

4. 競技レベルとパーソナリティ、マネジメント経験と組織コミットメントの比較においても差は無かった。

5. パーソナリティと組織コミットメントに関連があるかを検証したところ、「規範的（日本的）要素」と「存続的要素」の2要素に関して有意な差が認められた。スポーツに対する意識が高いほど、チームへの帰属意識に関して影響があることが示された。

5. 卒業論文の執筆を終えて

卒業論文の執筆を終え、本研究で大きな結果を得ることは出来なかったが、ハンドボールに関する研究が少ない中で、ハンドボール界に少しでも貢献したいという思いで選手やチームの特徴を調査し、少しながら理解することができたことは非常に満足している。

今回、本研究を進めるにあたり、ご指導を頂いた指導教官の小笠原先生、親身になってアドバイスをしてくださった大学院生の三倉さんに心から御礼申し上げます。また、卒論を執筆するにあたって、協力してくれたスポーツマネジメントゼミナール4年生には心から感謝しています。

最後に、本研究にご協力頂いた関東学生2部ハンドボールの大学、選手の皆様にも感謝申し上げます。